

アトモスフィア

人材育成

木南凌*

先日、ある研究所からのアンケート調査依頼に答えた。どのような科学分野が今後発展するか、掲げられた目標はそれぞれいつ頃達成されるか、行政はどの項目に重点的に援助すべきか、などが質問事項であった。国が重点的に援助すべきは人材育成だ、と迷わず回答した。若者が科学者・研究者を志望する環境が最近とみに劣悪化し、人材が育たないのでは、と危惧しているからである。若者に夢とそれを支える環境を整える必要がある。

大学での研究環境は世知辛いと異分野に進んだ友達やまわりの人々にこぼすことが多い。もちろん一方では自由に真理を探究する面白さも話すのだが、社会一般ではどうだろう、薄暗くて陰気な職場という認識が浸透しているようだ。最近の高視聴率テレビ番組となった「白い巨塔」もそうだ。私の子どもの頃は湯川博士の中間子理論などで、科学者像や象牙の塔・大学は輝いていた。高いハードルを幾つも越えなければいけないが、チャレンジするに値する目標と科学者は考えられていた。大学紛争のあった頃からだと思う、裁判官、科学者や大学教授を含めた権威の低下が徐々に進行していった。権威的で、閉鎖的なところは大いに反省すべきだが、若者は科学者、技術者、研究者に魅力を感じなくなり、最終的には若者の「理科離れ」につながった、と思う。

村上春樹が翻訳したことで話題になった、「キャッチャー・イン・ザ・ライ (サリンジャー著)」から少し転載してみる。若者の将来への不安が感じ取れる。主人公の若者が妹のフィービーに詰問されているところを抜粋した。

「何か言ってみて、将来何になりたいかみたいなのを。科学者になるとか、弁護士になるとか、そういうこと」

「科学者にはなれないね。科学にはからきし弱いからさ」

「じゃあ、弁護士は？ お父さんみたいに」

「弁護士も悪くはないと思う。でもさ、あまりぴんとこないんだ」「弁護士がいつもいつも無実の人間の生命を救ってまわって、しかもやりたくて、そういうことをやっているというなら、それも悪くないよ。でもさ、現実に弁護士になったらさ、そんなことをしている暇なんてないんだ」

その後、こんな会話が行われる。「誰かさんが誰かさんをライ麦畑でつかまえたら」という唄を知っているだろう。「つかまえたら、でなく、出会ったら」っていうのよ。続けて若者が語る、「だだっぴろいライ麦畑で小さな子供たちがいっぱい集まって何かのゲームをしている。ちゃんとした大人は一人もいないんだよ。僕他にはね。それで僕はクレイジーな崖っぶち立っているわけさ。で、誰かその崖から落ちそうになる子供がいると、かたっぱしからつかまえるのだよ。ライ麦畑のキャッチャー、僕はただそういうものになりたいのさ」

真摯に社会のために生きたい、という思いが伝わるが、それは弁護士や科学者になることでは達成できないと考えている。そんな考えに多くの若者が共感するという社会状況にあるようだ。

現在の大学環境をみてみよう。任期制を導入すること、ポストドク制度を充実させることには期待をもって眺めてきたが、期待通りには展開していない。多数のポストドクが生まれ、任期制からはじかれた若手研究者があふれはじめている。彼らの受け皿は単純に計算するとほとんどないはずだから、彼らはどうなるのだろうか。競争社会だから、一定レベルはそれでよいのだが、そのレベルを大幅に越え始めている。研究者志望の大学院生の将来に対する不安は膨らみ、教官側もその不安に面と向かって対応できないのが現状である。このままの状態が進行すると、大学はますますイメージダウンを招き、若者の「理科離れ」に拍車がかかる。

日本のスーパースターだった西塚先生が残念にも昨年亡くなられた。多くの人の追悼文が新聞に掲載されたが、高井先生（阪大）の昔を懐かしむ文章に惹かれた。「研究者になったら、こんないいウイスキーが飲めるのだぞ、と言われて、西塚先生の研究室に入った」というくだりだ。若者は先輩の背中をみながら、成長し自分の進路を選択する。科学者・研究者も悪くはないぞと思わせる、道しるべと自分自身がなれ、というメッセージが感じ取れる。夢を与えられない自分自身のいたらなさを棚に上げるつもりはないが、大学環境の悪化はそれだけでは解決できない大きな問題だと考える。若手研究者が育つ社会環境を形成する必要がある。

*新潟大学大学院医歯学総合研究科